

一 昭々坦々淨邦に通ず

私は私の家に歸るのであります。私の家は親の家でありまして、同時に私の家でもあります。他人の家に行くのならば、遠慮もいりません、氣兼もいりません。今行つては如何であらうか、果して行かれるであらうかと、氣遣もすれば、氣苦勞もします。豫め様子を伺つて置かねばならぬ必要もあります。が、我家に歸るのには、何の心配もいりませぬ。いつ何時の躊躇なく、ずかくと這入つて行かれます。諸佛菩薩の淨土ならば、歸らして下さいと願ひ祈る必要もありませんが、彌陀の親御の本國に歸るには、親の實意にまかせて、歸らうと云ふ氣の起る、それが求道であります。起るは私の心だが、起さして下さいる力は、蔭に親御の念力が働いて居るのです。「設ひ世界に滿てらん火をも、必ず過ぎて要めて法を聞け」と云ふ。親の本國に歸るには、何物をも打措いて、四圍一切に顧慮するなく、サツサと進み行けとの意であります。御親は常に喚んで下さる。互の間の墻壁を去つて、親子一體佛凡一體。大道は昭々坦々として淨土の都に通ず。上げよ重き尻を、立てよ弱い腰を。沈痛なる自己發見によつて、自己の眞價と尊嚴とを感じ來る時、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流さざるを得ないでないか。

けれども、我等が此の世に於ける生活は、獨り暮しである。とはいへ、一面賑やかな親付きである。佛の力は絶えず私に加へられ、我が血に佛の血は通ひ、我が肺に佛の息を吸うるのであります。靜かに此世の一面だけ眺めてみれば、實に一人一人のしのぎである。「後生こそ一人しのぎなり」とは蓮如上人の仰せなれども、後生までは待たで、今生こそ一人凌ぎなれ。今生が既に一人しのぎなればこそ、後生が一人しのぎであり、同時に亦前生が一人凌ぎであつたのであります。近い所此世に於て、一人々々が自分々々の世界

を持つて、自分々々の世界に住んでゐるのである。大雑把に大勢が、一緒にたに、同じ道を同じ様に、ガヤ／＼と進んで行くのではない。實に一人々々が、自分々々の道を、自分々々が歩んで行くのであります。

「同病相憐む」といふ。病氣の苦しきは、病人か又は病氣した人でなくては解らない。それも只病氣といふだけでなく。頭痛持の辛さは、腹痛の人に解らず、脚痛の困り方は、齒痛の人に解らぬ。矢張り同じ質の病氣の人でなくては、其の味が解らぬだけ、それだけ、相憐むと云ふことも出来ない。子供を死なした淋しさ悲しさは、實際子に離れた人でなくては知られぬ。夫に先立たれた手頼なさ不安さは、眞實夫に後れた人でなくては想像だに及ばぬ。とはいへ、いよ／＼の處になると、夫れ／＼皆別々でありまして、眞底から之を知り抜くことは出来ませぬ。その氣質に因り、體質に因り、境遇に因りて、受くる所の感じは、悉く別異でありますから、何處までも、人は獨り／＼で、自分の世界に住まねばなりません。従つて、眞實に自己を知る者は自己である。

或る事件について、他人に相談を持ち掛けて見る。「好からう、さうであらう」位のことです。「やつて見たまへ」と云ふが關の山だ。半分は決めて呉れても、あとの半分は自分が決めねばならぬ。よし親友とか兄弟とか親とかで、七八分、思切つて九分九厘まで、定めて呉れた所で、残りの三分二分乃至一厘は、自分で定めねばならぬ。たとひそれが命令的に全部を決定して来たかとして、最後の實行者は自分である。人の食うた御飯では、自分の腹は脹れぬ。自分の空腹を癒すには是非とも自分で掻込まねばなりません。この意味に於て、自分の世界は自分の創造である。自分の外に創造者もなければ、製作者もありませぬ。

然り。私は私の世界を創造しつゝあるのである。燈火は自分で光を放つて、自分の光の眞中に住んでゐる。而もその光は、刻々に放つて、刻々に進み行くのであります。私の周囲を包む山も川も、雲の去來も、風の動靜も、人々互に共通のやうに見えても、實の所、共通なるものは、一つもありはせぬ。私は私の天地に迎へ入れられたものでもなければ、境遇に呼込まれたものでもない。世界の創造者造物主は、實にこの私なのである。私が創造するのである。向ふにあつて私を待つのではない、私が勝手に建設し、隨意に製作するのである。佛語を以て云へば、自己以外のものは、すべて自己の依報である。而もこの依報は、主體たる自己即ち正報そのものゝ、表現に外ならない。かくて私は私の世界の主人であります。

昔者、唐の李文公、一日、藥山惟儼禪師を訪れ「如何なるか是れ、惡風船を吹いて鬼國に漂着す」。惡い風が吹いて鬼の國へ、船を流し落とすとか云ふこととで御座いますが、これは一體どうした譯でしやうと、質問いたした。時に藥山呵々大笑して、「李翱小子、之を問ふ、何の爲ぞ」。李翱貴様の如き子倅が、そんな事を聞いて何にする。鼻であしらひ、顎で嘲つてゐる。李文公とまで尊敬せられて居る人が、小兒扱ひにせられては、胸穩かなるを得ない。腹の底の虫がムクムクと動き出して、怒りの様子が顔に顯はれた。禪師すかさず。「あゝお怒りですか。その瞋恚こそ、所謂惡風船を吹いて鬼の國へ流すので御座る」とやられたので、李文公グウの音もあがらなかつたが、成程と痛く感心せられたさうです。その感心が、今度善風船を吹いて佛國へ渡すのでありませう。